

教養の有無者

大西 敦士

大学で教養というものを勉強してから、かつて祖父がしていた仕事場の光景を思い返すようになった。僕の家は金物屋を営んでおり、祖父は暇があれば金槌と鉋を手に、黙々と大工道具を作っていた。木と鉄を打ち付ける音が響き、買い物に来た常連客が、その道具の調子を言いに来たのをよく憶えている。

「人間は、彼が日常従事している労働のうちに、彼の世界観の基礎を求めなくてはならぬ。彼は主として、自分の労働から自力で見聞を引き出すようにしてはならない。あらゆる子供に教えられる知識は、彼の労働を中心として、集約されなくてはならない。」(ペスタロッチ)

子供の頃に、店番という名の遊びをして見てきた親の姿は、言葉で伝えられるよりも多くを学んだ。自らの手で物を作る喜び、作った物を上手く使いこなすこと、それが役立って感謝されること。行いのひとつひとつが社会とも繋がっていく。あまり意識せずとも理解していたように思う。

41♦

そもそも「教養」の二字は、立派な建物でまなぶこと(教)と、牧羊のこと(養)を意味する。羊を飼うということは、養い育てることであり、その羊の毛を刈って服にし、育てた羊を食べることになる。学校で勉強することはもちろん、実感を伴って日々の営みがあることが大事であろう。昔に戻るほど、それぞれの技能が生活に直結し、その場で起きることであつたはずだ。

しかし、今はコンピュータをはじめとする機械とネットワークに浸り、随分と複雑になってしまった。誰かと繋がることは可能だが、その中身を理解することは難解で、修理をしようにも家に有る物で作れる部品は無いと言っていい。遠隔地まで届く巨大なシステムが有ることを、気にする暇も無いような速さで通信している。便利であるから、恰も万能になったかのように錯覚してしまうが、保健室にやって来る学生に限らず、「自分のやりたいことがわからない」と、多くの人から話を聞く。「そんなことまでもか」と驚いてしまうが、豊かさの反面、まわりのものが繋がらず、また、それに気付けない現代人と世の中の怖さが現れているように思う。

仏教では、「無明（むみょう）」という言葉がある。真理にくらい無知のことで、最も根本的な煩惱であるとして、取り払っていくべきものと考えられている。教義を信じるか否かは別だが、不安になって苦悩するのなら、それを正していくのが健全であろう。

教養があるかと聴かれても、それ以前に「論外」であると言えないほど、僕を含めて「有るのか無いのかわからないような者」が大勢居る。そうでなければこんな社会にはなっていないだろうし、（こんな大学にはなっていないだろうし、学生が保健室に悩みを抱えてやって来ない）、地球の環境がここまで非道になることも無かったはずで、主体性を持ち、教養を身に付けることなど叫ばれる必要も無い。

「この世には、空虚な人々という名前で知られている多くの人々がある。彼らは他人の知力によって賢く、何事についても自己の意見をもたないが、一方では勉強もし、この世のあらゆる事物を注視もしている。彼らの空虚さは、彼らが他人のものを完全に借用し、彼らの脳髓が他人の思想を消化せず、受け入れたときと同じ形でそれを舌を通じて伝えるということにある。これは非個性的な人々である。」（ベリンスキー）

◆42

今年度は特にコロナウィルスの影響で、仕事にせよ学校にせよ、皆が機械を通じてやり取りすることは避けられない事態となったが、殆どの人には手に余る物なのだから、工夫はしてもほどほどに距離をとり、別のことをする時間を設けようと努力し、自分と向き合うことが必要であろう。感染症によって生活が変わってしまったのだから、自己の考えを改め、普段の行いも転換できる絶好の機会にしたい。たとえ他人の意見であっても、今じっと立ち止まることは力をつけていく第一歩になる。これから何をしてどのように生きるか、僕の関わるひとりひとりと話を続けて行こうと思う。